



アコースティックバンド「テノヒラ」のボーカル 愛南町出身の kiku さんがつづるふるさとエッセイ

— あいなん音故地新 — 『働く』ということ

『働きたくない、働かずにお金儲けしたい。』…先月、小学生と高校生、そして大学生っていう、10代と二十歳を越えたばかりの子と接する機会があった。冒頭のセリフはその子たちが言うところのもの。彼らは住んだる場所も年代も性別も家族も違う。そんな3人から同じセリフが出てきて、なんとも複雑な気持ちになった。私が子どもの頃、社長になりたい、お金持ちになりたい、って子はおっても『働きたくない』って声は聞いた記憶がない。3、40年前と比べたってどうしようもないのはわかるとる、今は子どもたちを取り囲む環境も全然違うけんね。時代と環境を作った私たち大人に責任があるし、楽しいことやラクなことを選ぶのは当然のこと。子どもたちは悪くない。

と、ここまで書いて、知り合いの青年が家畜人工授精師の資格を取るために勉強しとることや、あることに挑戦するために海を渡ろうとしている子に会って嬉しくなった。やりたいことを見つけ、それに向かって進む・進もうとしとる、ということはこんなにも眩しいことなのか！どんどん進め。自分の力で、自分の足で歩いた一歩は何事にも代え難い。いつかその先で『ありがとう』と言われながら受け取るお金に金額以上の価値があることを知るはずや。 (テノヒラkiku)



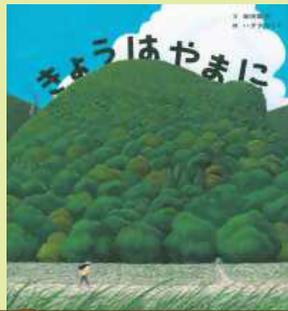
御荘文化センター図書室より

“9月の新着図書ピックアップ”の紹介

【絵本】

『きょうはやまに』
ハダ タカヒト(絵)
柴田 聡子(文)
講談社(発行)

山の入り口。女の子は十数えるまでには帰ろうと決め、足を踏み入れる。そこはぽーんぽこ山。緑の葉っぱが生い茂り、あちこちに伸び放題の枝や根っこに小さな生き物たち。濃厚で怪しげ、かつ可愛くて美しい山に響くのは、躍動感にあふれた変てこな言葉「ごぶぶっ、ろろろろろろ」はたして無事に帰ってこられるのか。



【小説】

『ババヤガの夜』
王谷 晶(著)
河出書房新社(発行)

暴力を唯一の趣味とする依子は、喧嘩の腕を買われ、暴力団会長が溺愛する一人娘尚子の運転手兼護衛を任される。真逆の二人は次第に距離を縮めていき、友情でも愛情でもない名前のつけられない関係で結ばれる。二人の関係を軸とする血と暴力の傑作シスター・バイオレンスアクション。日本人初のダガー賞翻訳部門受賞。



御荘文化センター図書室では、毎月「御荘文化センター図書室だより」を発行しています。図書室だよりを通じてピックアップ図書以外の新着図書情報やそのほか新しい情報を皆さまに発信しています。町のホームページにも掲載していますので、ぜひご覧ください。



愛南町
ホーム
ページ